

沿革・自然

1 本県の沿革

上古の時代、日高見の国と言われていた東北地方は、白河、菊多(後の勿来^{なこそ})の関を築いて、その南下を防いだという蝦夷^{えぞ}のすみかであったが、次第に大和朝廷の勢力が浸透し、「国造本記」によると成務天皇の5年に、石城、染羽(後の双葉)、浮田(後の相馬)、白河、阿尺^{あさか}などに国造^{くにのみやつこ}が置かれたとあり、大化改新の後(大化2年、646年)国郡制が施行されて、東北地方に道奥国^{みちのおくのくに}が置かれた。和銅2年(709年)には、そのうち12郡を分けて出羽国が置かれ、明治元年12月に、岩代、磐城、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後に分けられるまでの1,200年近く東北の広大な山野は、陸奥、出羽の二国に大別されたままであった。

本県には旧石器文化遺跡を初め、縄文、弥生、古墳文化遺跡等が数多く分布し、更に7世紀末の白鳳期のせん仏^{せんぶつ}が白河の借宿^{かりやど}廃寺跡から発見されるなど、当時すでに仏教文化が入って来ていたと推定され、奈良、平安期には目もあやな文化の花が咲き、荘厳な仏像や、勝常寺(会津)、大蔵寺(福島)、白水阿弥陀堂(いわき)などのすぐれた仏閣等が残されている。

文治5年(1189年)源頼朝の奥州征伐により、北方の雄、藤原氏が滅び、鎌倉御家人の伊達、伊東、結城、芦名、相馬氏等が新しい封建領主となったが、鎌倉幕府が衰えると、南北朝動乱期を経て群雄割拠の戦国時代に入った。

群雄のうち伊達氏は四周に威を張り、政宗の代に至って本県の大半を制したが、豊臣秀吉に屈して、その武将蒲生氏郷が会津の領主となり、のち上杉氏がこれに代わった。

徳川時代に入ると、北の押さえとして、会津、白河に親藩を配置し、福島、二本松、棚倉、三春、平、相馬などに大名が置かれ、県内は幕領、藩領、飛地が錯綜して、領主の更迭、封禄の増減が頻繁に行われた。

慶応3年10月、大政奉還が行われ、錦の御旗を楯とする西南諸藩は、江戸を制圧した余勢を駆って東北に迫った。京都守護職を辞して、本領の会津に退いていた松平容保と、これに同調する東北諸藩は、奥羽越列藩同盟を組織して抵抗したが、慶応4年5月1日の白河城をはじめとして次々と落城降伏し、同年9月22日に会津藩が降ったのを最後として、会津白虎隊・娘子軍や二本松少年隊の悲劇を生んだ本県の戊辰戦争は終結した。

明治2年6月、諸藩主は版籍を奉還して藩知事に任命される一方、斗南藩に移封された会津藩の地などに、若松、福島及び白河の3県が置かれた。

明治4年7月14日に廃藩置県が行われ、その後統合・改称等が繰り返され、明治9年8月21日には、若松県、磐前県、旧福島県の3県が統合されて、ほぼ現在の姿の福島県が成立した。

明治30年には郡制施行により、県内17郡に郡役所が置かれたが、大正12年3月の郡制廃止により姿を消した。

県制は明治31年から施行され、市制は明治32年に県内ではじめて若松市に施行された。

県内の市町村は、明治19年末で93町1,638村であったが、大合併の結果、明治22年4月1日には21町392村となった。

その後、昭和28年10月1日から全国的に推進された市町村合併等により90市町村となり、平成16年から始まった「平成の大合併」を経て、令和5年9月末現在の市町村数は59(13市31町15村)となっている。

1図 県の位置

